慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポール・ラップと聖書考古学
Sub Title	Recent trends of biblical arcaeology
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.4 (1975. 6) ,p.39(391)- 56(408)
JaLC DOI	
Abstract	To write an article which is to follow my former study, "A Historical Survey of the Excavations at Samaria", Shigaku 41-3 and 42-2, it has been necessary for me to know what the biblical archaeology today is. Fortunately as a staff-member of the Tel Zeror Expedition I visited Israel again in 1973 and had opportunities to work at excavations of Tel Anafa, Tel Qasile and Tel Aphek, to see some of major sites such as Jerusalem and Tel Beer-Sheva and to discuss related problems with specialists. This visit made it possible for me to follow more recent development of methodology in the biblical archaeology. It is hoped that the discussions in this article will benefit the renewed excavation at Tel Zeror, which is to run for coming several seasons.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19750600-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポール・ラップと聖書考古学

小川英雄

一

シリア・パレスティナ考古学の方法論の発達史について、筆者はすでに若干の考察を行ってきたが[1]、本稿では、それ等を更にふえんし、新しい観点を加え、特にアメリカ人ポール・ラップ[2]を中心として、最近の問題点を指摘したい。

元来、シリア・パレスティナの考古遺跡は、博物館や展覧会に陳列して見ばえのする出土物に乏しい。レバノン海岸の古都ビュブロスやウガリット[3]はこの点では、現在においても例外にすぎない。従って、大規模な発掘調査は、メソポタミアやエジプトに比較して遅れて開始されたし、資金的にも貧困であった。しかし、この地はキリスト教・ユダヤ教のゆかりの土地として、これの宗教の歴史に関係のある遺跡が多く、やがて、それが考古学的調査の独自の対象として価値をもつようになった。その際に、二つの要因がシリア・パレスティナ考古学の進路を決定ずけたように思われる。一つは上述のような出土物の貧困であり、そこからここでは宝捜し的関心は早くから失われ、本来の考古学的調査の目的である歴史の解明が志向された。但し、その歴史とは主として新旧両聖書とのかかわりにおいて考えられた歴史であったために、不可避的に他の考古学の分野にはみられない問題、即ち、聖書の信仰内容の理解への考古学や歴史学の寄与という特異な問題が常にからんでいる。その結果、シリア・パレスティナ考古学の別名として一般に行われる聖書考古学[4](Biblical Ar-

chaeology）には特殊なニュアンスがつけ加わり、信仰上の価値判断に関係があることを暗示するようにうけとられる場合があった。ラップは考古学の歴史研究法としての限界はかなりはっきり認める一方では、このような信仰的関連を嫌い、信仰と考古学の分離を強く主張し、聖書考古学ということばは、聖書に関係のある時代（biblical period）についての考古学としてしか意味はなく、他の地方や時代についての考古学と少しもかわりはない、と主張した。[5] 通俗書[6]に見られるような、考古学による信仰の真理性の実証という考え方は別として、シリア・パレスティナ考古学を歴史や神学と何等かの意味で結びつけて理解するというのは、アメリカの学界で伝統的な態度であり、考古学の独立した方法論を主張するラップもその枠を出るものではない。これに対し、イギリスのパレスティナ考古学の潮流は、とりわけケニョンとその弟子達の場合、考古学者としての熟練に重点をおき、歴史や神学との関連は敢えて問題としない傾向にある。[7]

出土物の貧困ということは、必らずしも歴史の史料として価値がないというのと同じではないことにも留意する必要がある。オルブライトは先輩 C. S. Fisher のことばをくり返しながら、こう云っている。[8]「パレスティナ考古学は（オリエント各地の考古学のうちで）一番興味深い――出土物が多様で、文化的に複雑な局面を示すという点で、均一で単調なエジプトやメソポタミアと異るからである。」即ち、博物館用の美術品や珍品は少いが、それと史料の面白さや価値とは問題が別である、という事実に、どうしても気づかざるを得ないのがパレスティナ考古学である。ここに、土器の編年にもとずく歴史の再構成という、考古学本来の方法論が発達する原因の一つがある。土器、特に日常生活に使用されたありふれた形の土器の形状・装飾・品質の変化以外に、長い歴史を一貫して示す指標は存在しない。この点で、青銅器時代初期から文字を有し、碑文、壁画、粘土板などに豊富な文字史料を見出しうるメソポタミアやエジプトとは考古学的様相がはっきり異っていると云える。これ等の地方の考古学では、今日のパレスティナ考古学における程十分な土器の編年が確立していない。要するに、後者はたとえ歴史時代に入った後においてさえも、先史考古学に近い方法に頼る必要がある。土器

の変化によって、遺跡の歴史を知るためには、ある相関々係の下に見出される幾つかの特色をもった土器群と遺跡の土層との関係を詳しく学問的に観察する必要がある。それによってのみ古代の特定の時期の生活を代弁する遺構の年代を確定することが出来るからである。こうして、パレスティナ考古学においては、考古学本来の方法である土器の形態論（typology）と層位学（stratigraphy）とが最も深い関心のまとになって行く。このような方法論上の原理は、一八九〇年におけるFlindus PetrieのTell el-Hesi発掘から一九〇八―一九一〇年におけるReisner-FisherのSamaria発掘までの間にすでに見出されていた。遺跡の堆積土の分析、土器と遺構との年代的相関関係の調査などは、Samariaの報告書中でReisnerとFisherとがすでにくわしく論じている。[9] そして、M. Wheelerの否定的評価[10]にもかかわらず、最近になってReisner-Fisher法の原理的正しさが再評価され、ウィーラーのことばは「確実な知識の欠除、誤報、不合理な偏見」から出たものとされ、ケニヨンでさえもレイスナーの報告書を正しく評価していなかったことが指摘されている。[11] 実際、ケニヨンが一九三一―三四年にサマリアで試みた新しい方法はレイスナーの「域積土・土層による調査法」(debris-layer method）の復活と再確認であったとも云える。彼女はそれをイギリスの先史考古学からもたらしたのであった。

シリア・パレスティナ考古学の進路を決定ずけたもう一つの要因は、遺跡の状態である。この地方は石造文化圏に属するので、建造物は石と日乾レンガを中心につくられ、それに泥土や漆喰が加わるが、木材はわずかに天井のはりなどとして使われる。この点で、シリア・パレスティナは地中海地域とオリエント世界の建築法の交点にあり、建造物倒壊後に建材が堆積しやすい地方であると云える。その上、メソポタミアやエジプトと比較すれば、支配者階級の住居でさえもきわめて貧弱であり、常に倒壊と再建をくり返す結果となり、ここにも又建材堆積の容易さが考えられる。又、倒壊した建造物を洗い流す自然的風化・崩壊（erosion）や土砂の堆積をもたらす強い風雨は冬期の一時期にしか見られない上、大河がないので洪水による流失も考えられない。更に、この地は安全した強力な統治権力が長期にわたって支配したことが殆ん

どないため、都市単位の小国の興亡が歴史をつくったために、建造物の倒壊・焼失のチャンスが他より多かったであろう。これ等の風土的・歴史的条件の下では、水利・交通・軍事などの他に、零細な農地の宅地転用の防止という理由も加わって、常に一定の敷地上に集落を建設するという西アジア通有の傾向が、現在ではテル（Tell）と呼ばれる廃址丘が容易に形成されたのである。そのプロセスは若干の重要な地点では初期青銅器時代から、その他の多くの地点では中期青銅器時代から進行し、多くの場合ローマ帝政期にいたるまで連続した。勿論、中間にそのテルが放棄されていた一定時期があった場合もあるが、概して土層は順調に堆積し、生活層はかなり明瞭にその痕跡を保存され得たといってよい。(12) このことは出土物の貧困さにもかかわらず、層位認識にもとずく遺跡の歴史の再構成にとってきわめて有利な条件を提供するものである。

要するに、文字史料を出土することが稀で、博物館向きの出土物にも乏しく、他方では聖書の歴史に対する強い関心と結びついており、多くの時代の生活層が大小さまざまなテルに看取されうる、というシリア・パレスティナ考古学の研究対象の持つ特性は、他のオリエント考古学とは異り、ローマ帝政期にいたるまでかなり典型的な先史考古学の方法、即ち厳格な層位学的方法の適用を可能にさせるものである。一九三〇―三四年のサマリア発掘にケニョンがもち込んだのは、まさにこのような先史考古学的な方法であった。Wheeler-Kenyon 法は、日本の考古学と同じように、長期間の先史時代を研究の主要な対象とする英国の考古学の風土からパレスティナに導入された。それはその時までに、ウィーラーのリーダーシップの下に確固としたものになっており、英国国内は勿論、アフリカやインドにおいても用いられていた。上述のように、レイスナーがオリエントの風土の下で苦心して編み出した同種の方法（debris-layer method）は、すでにその頃忘れ去られており、サマリアにおけるケニョンの同僚たちでさえも、ペトリーに起源をもつ旧式のルーズな発掘法と古典考古学と直感とに依存していた。彼等は元来イギリスの先史考古学によって育てられたのではなかったので、ケニョ

ンの方法は発掘期間中も、それにつゞく長期間にわたる出土物の整理中にも彼等によって採用されなかった。勿論、一般には未知のまゝであったと云ってよい。その原因の大半は報告書[13]の発行の著しい遅れである。もし、第二次大戦がなければ報告書第三巻の発行はより早く行われ、それを第一巻と共に読めば、ウィーラーの伝統の導入がいかに遺跡の歴史の解明にとって有効かが、もっと早く一般に知られることになった筈である。原理的には同じであったといっても、レイスナーの報告書[14]を読む時、そこにはケニョンの報告書ほどの明解さ、簡潔さもなく、又不十分な解釈や不正確さがいろいろ看取される。

二

このようなわけで、Wheeler-Kenyon 法がシリア・パレスティナ考古学界で俄に脚光を浴びるようになったのは、一九五〇年代からである。[15] そのころ、ケニョンはロンドン大学考古学研究所の西アジア考古学のリーダーとなり、自ら発掘法を著した。[16] そして、Jericho (1952–58) と Jerusalem (1961–67) の発掘を指揮し、その際に、堆積土層と遺構の層位学的分析を組織に行うことを目的として、トレンチの断面を一定の位置関係でなるべく多く観察するのに便利なボルク (baulk 英、balk 米) 法を採用した。これは遺構の全面的露出を犠牲にして、巾一メートルから五〇センチメートルの境界線の土手を発掘中の敷地内に可能な限り多くのこしておき、その両面の断面図を分析する方法である。通常そのために、トレンチは六メートル四方又は五メートル四方のグリッド内に設けられ、方形のトレンチの四面は細心の注意をもって保存され、記録され、分析される。

この方法論はケニョンの弟子達の間でまず試みられ、主としてヨルダン領内の多くの遺跡の発掘で成果を収めた。ラップも指摘するように、P.J. Parr, C. Bennett, D. Kirkbride, B. Hennesy, K. Wright, H. Franken 等の仕事がそれ

である。[17] 彼等の気質の特色は考古学プロパーの専門家、特に層位識別と土器鑑定との技術にプライドを持つと同時に、歴史や聖書についてはことさらに興味を示さないという点にあろう。このような態度は、ライトが指摘するように、彼等の多くがジェリコで発掘に従事するようになってから強まったもので、特に、歴史や聖書の問題を常に顧慮するアメリカのパレスティナ考古学に対し、かなり批判的な発言となってあらわれた。[18] その間、アメリカの研究者で、ジェリコの発掘に加わりその経験を自らの発掘で生かそうと試みた者もあったが、失敗に終ったようである。[19] 実際、オルブライトが警告するように、Wheeler-Kenyon 法は専門的な高度な訓練と事前の周到な準備がないと実行不可能なのである。[20]

アメリカのパレスティナ考古学が Wheeler-Kenyon 法をとり入れ、それを定着させるのに成功したのは、G. E. Wright のシケムの発掘からである。[21] しかし、ライトはこの方法をそのまゝ模倣したのではなく、オルブライトが書いているように、[22] レイスナー以来のアメリカの方法論を考慮に入れた、より広いパースパクティヴに立つ、より組織的な改良された方法を案出し、それを実行に移した。上述のように、レイスナーの方法は原理的には、ケニョンの方法と同じであり、ライトはその点を常に強調しているが、ライトがシケムの発掘でケニョンの方法と組みあわせて組織化したのは、オルブライトが Tel Beit Mirsim の発掘（一九二六―三二）で用いた方法であった。

オルブライトがこの発掘で確立した土器の編年は、きわめてユニークで永続的な価値をもつものであった。今日、一九五〇年代以後の、ケニョンの影響をうけた発掘調査以外は信用出来ない、と主張される中で、ケニョン自身のサマリア発掘とオルブライトのテル・ベイト・ミルシム発掘だけは例外の地位を与えられている。[23] オルブライトは H Vincent と並んで当時最もパレスティナの土器に通じていたが、発掘現場における土器観察の重要性を強調し、出土地点や出土した土層のチェックを厳密に行い、堆積土と土器の器形の変化の関係を歴史的なパースペクティヴで理解しようと努めた。又、土器の実測法を改良し、形態の異同をより敏感に捉えようとした。この方法はオルブライトの方法に対する最近の再評価

では、ローカスから層位に至る方法（locus to stratum method）と呼ばれているが、[24] Wheeler-Kenyon 法とは研究の手順で異っている。即ち、後者は堆積土や土層の観察からはじめるという先史考古学的方法をとるのに対し、オルブライトは出土物の出土地点の注意深い観察から出発して、[25] 次第に理解を周囲に及ぼして最後に層位に到る、という方法をとった。この点は、ケニヨン学派の一部（フランケン等）によれば、オルブライトの方法では土器の編年や層位を研究室で再構成することになる、と批判されている。しかし、ライトはこれを反論し、自らしシケムの発掘では、出土地点における土器の確認と記録、毎日の作業過程における土器の年代研究を特に重要視し、それを調査員（fieldsupervisors）の仕事の中に組み入れた。この点は同じころ、Hatzor の大規模な発掘（一九五五―八）を指揮していたイスラエル側の考古学者 Y. Yadin によっても考えられていた。現在イスラエルで活躍している多くの考古学者（例えば、R. Amiran, T. Dothan, Y. Aharoni, M. Kochavi 等）はヤディンのハツォル発掘の際の同僚や助手であったが、彼等の方法はケニヨンのグリッド・ボルク法とオルブライト以来の出土物分析法を一つのプロセスとして組織化したものであり、[26] ハツォル以来原理的には変っていない。[27] そして、彼等の現場運営はオルブライトの根強い影響下にある。[28]

ライトが云うように、[29] オルブライトは、第一に出土状況の適確な観察と合理的推論にもとずいて、イントルッシヴを除去し、土器の標準化石を確立し、第二にそれを古代オリエント史全体のパースペクティヴの下においたのであり、同じアメリカのパレスティナ考古学者たちが、この二つの業績を継承することになるのは当然である。

三

ポール・ラップ[30]はライトがシケムでこのような仕事を行いつゝあった時のライトの弟子であり、それから死ぬまでの一四年間に、Kenyon-Wright 法ともいうべきこの新しい方法で多くの業績をなしとげた。彼は二十五才になるまでは、教

育学や音楽の研究に打ち込んでいた。しかし、セム語学の研究に興味をもって、一九五五年にオルブライトに弟子入りし、師の助手をつとめていた同学の女性と結婚して以来、パレスティナ考古学に深入りすることになった。翌年ライトの下にうつり、直ちにライトが開始したシケムの発掘の第二シーズンに参加した。最初のフィールド・ワークが二七才の時であったこと、その後の彼の活動がきわめて目ざましいものであったことを考えると、彼の才能と勤勉を推察することが出来よう。彼は一九六八年にいたるまで殆んどパレスティナ（ヨルダン側）に常住し、その地のすべての発掘に立会い、朝から晩まで土器の研究に没頭した、といわれている。一九六〇年にはライトの下で、パレスティナ考古学の土器編年史上記念碑的な学位論文[31]を完成し、他方ではイェルサレムのアメリカ考古学研究所（現在のオルブライト研究所）の所長（1961-65）をつとめ、'Arâq el-'Emîr, Tell er-Rumeith, Dhahr Mirz-baneh, Wâdi ed-Dâliyeh, Tell el-Fûl, Bâb edh-Dhrâ', Tell Ta'annek[32]などの発掘を指揮した。シケムの発掘において、彼はライトと共に中心的役割を果し、多くの同僚や後輩と共に新しい方法の組織化を行った。その一人、Joseph Callaway は et-Tell(=Ai) の発掘(1964-) に向い、ラップ自身は上記の諸遺跡をフィールドとした。他方、ライトは一九六四年[33]にイスラエル領内の遺跡 Gezer の発掘を開始した。ラップが専ら活動の場をヨルダン領内に選び、イスラエル領内の考古学的調査に関係をもたずに終ったことには最近のパレスティナ問題が何かからんでいるようである。彼は一九六七年の六日戦争当時、普通の研究者であればへこたれてしまうような環境の中で、ごく短期間におびたゞしい仕事をなしとげたが、それと同時に、公然とイスラエルの政策を批判したらしい[34]。多分、彼は占領された旧ヨルダン領の帰属について、ケニョン等と同じ意見を持っていたのであろう[35]。

ライトはゲゼルの発掘をはじめて間もなく、シケムの隊員であった W. G. Dever と H. D. Lance に指揮をゆだねた。他の多くの隊員もシケムから来た。彼等の責任が他の発掘の場合よりも重いことは、シケムでの実験ですでに分っていた。現場における仕事のこまかいこと（観察と記録）が、彼等にはじめから相当な経験と知識を要求した。ラップも新しい方

法では、調査員の能力が高くなければならず、又この人たちの仕事は非常に手がこんでむずかしいことを認めている。[36] ゲゼルでは新しい方法論による入念な現場管理とスタッフの教育とを同時に目標とすることとし、それを効果的に行うために、「調査員用発掘調査の手びき」(Excavation Manual for Area Supervisors) がランスの手でまとめられた(一九六七)。これはその後、アメリカ系の他の調査隊でも採用されたとみえて、筆者が一九七三年七月に参加することが出来た、ガリラヤ湖の北方にある Tel Anafa の発掘[38]でも調査員の間にコピーが渡っていた。

「手びき」は約三〇ページのリーフレットにすぎないが、そこには Kenyon-Wright 法の実現に必要なすべての手順が実例に則して述べられており、いわば調査員用のトラの巻とも云えるものである。全体の構成は次の通りである。

序文
第一章　発掘作業
第二章　記録法
第三章　作業と記録の実例
用語辞典
記録用紙のコピー

序文には読者 (field supervisors) の調査隊内での位地、責任などが書かれている。要するに、彼等は受持地区の方法論的管理に責任を負い、すべての知識を隊長のために明確に報告する。第一章では、まずこの発掘の方法はケニヨンのイェルサレムとジェリコの発掘及びライトのシケム発掘の方法にもとずくことが明らかにされる。[39] ケニヨンの方法とは、トレンチのセクションとボルクを分析・記録することによって、遺跡の各土層を注意深く識別し、解釈することであり、[40] ライトの方法とは、土器の細目にわたる毎日の分析によってケニヨンの方法を充実させ、層位の分析に際し、指標として役

立たせることである。[41]この二つの方法を実行するための基本的な技術として、ボルクのつくり方と、土器を「汚染」させることなしに扱う手続きが述べられる。次に、トレンチの掘り方、土層の見分け方、特にピットの取り扱いが具体的に記される。第二章では、調査員が毎日きちんと行うべき記録の種類（ノート・ページと呼ばれる出土状況の記録書、ディリー・トップ・プランと呼ばれる毎日の担当地区の状態の略図[42]、ローカス・シートと呼ばれる各地点の発掘・出土状況の毎日の記録）が述べられる。[43]それに付属する問題として、ローカスの設定の仕方、描写方法などがくわしく述べられる、第三章においては、調査員の作業の一日分を順序を追って詳説する。出土物のためのバスケットの処理法、書類の記入の方法、写真撮影、測定法、とりわけファウンデーション・トレンチの発掘法が具体的に示されている。用語辞典には、専門用語で現場においてしばしば用いられる例について定義が与えられる。約四〇語、それ等は層位関係、土器関係、測量、建築などにわたっている。

このようにして開発された技法は過去一〇〇年間に及ぶシリア・パレスティナ考古学の一つの総決算であるといえる。実際、これ以上の方法論的洗練は野外作業としてはあり得ない。筆者のテル・アナファにおける観察では調査員の多忙さはかなり息づまるような感じを与えた一方、ヴォランティアたちは調査隊の目的意識から切りはなされた存在となり、一種の労働者と同じ立場におかれていた。ラップはこの新しい方法を一つの帰結として、その効果を信じたが、他方では小区域を多くの経験豊かな調査員の動員によって発掘するため、船頭多くて船山にのぼる危険、完全主義的傾向がこうずるために、報告書の作成に手間どり、いつになったら正式の報告書が出るのか見当がつかない[44]、又刊行されたとしても、フィールドの完全主義にふさわしい記述がなされるという保証は何もない、など不安な要素もいろいろあることを警告し、この新しい方法もいつかは幼稚なものと思われる日がくると書いている。[45]しかし、シリア・パレスティナ考古学の諸問題点、たとえば、鉄器時代の土器の編年、初期青銅器時代から中期青銅器時代への移行期の様相、中期青鉄器時代の「ヒク

ワス」の土塁の年代などは、このような入念な方法の実施をせずには、何等建設的な資料を提供出来ないほど議論が細目にわたっていることも事実である。テル・アナファの発掘も、最初から初期ヘレニズム時代の土器の編年の確立をめざしていた。即ち、これまで不完全にしかわからなかったこの時代の土器を、厳格な層位学的発掘によってとり出し、標準化石をつくろうというのである。(46)

以上の考察によって、ポール・ラップはライトがケニョンの方法を採用して、従来のアメリカの聖書考古学を現在の問題意識に耐えられるだけの厳密なものにしようとした時に、彗星のように現われてその仕事を助け、自らもその路線にそって重要な作品を残した、と評価することが出来よう。彼は考古学プロパーの専門家としては短期間に驚くべき完成を見せていたが、考古学と歴史学、考古学と宗教史の関係についての考え方は、まだ十分練れていなかった、と見られる。この点での彼の考えは要するに、考古学と歴史学とは独立した研究分野であるべきで、それぞれ独立に成果を出し、その上で綜合されて、更に高い歴史像をつくるのに寄与すればよい、という議論にすぎず、これはことさら云うべきものではない。(47) 考古学と他の分野とが非科学的な形で融着することは勿論あってはならない。しかし、ラップはこのような論点と結びつけて、いくつかの不可解で狭量な主張を持っていた。すでに述べたように、アンドレ・パロは彼の書いた本に対する書評でそれを指摘しているし、オルブライトやライトの論文に対する彼の書評(48)も何か理解のなさが感じられるものである。聖書考古学の方法論的細密化、パレスティナ考古学者の職人化は今後ますます著しくなるであろうが、それに比例して全オリエント史的パースペクティヴの必要性も、ますます強く感じられるようになるであろう。ラップはすでに、一連の報告書において、このような方面に対する能力を示しはじめていたし、(49) 考古資料の歴史的解釈という点にアメリカの聖書考古学の伝統がある、ということも知っていた。(50) もし、ラップが事故死することがなければ、狭量さがなくなってオルブライト以来のアメリカのパレスティナ考古学の伝統を代表する考古学者になったであろう。

付記

本文を書き終えた後、更に若干の文献に接することが出来たので、その問題点を付記しておきたい。本文中のゲゼル発掘の指導者 W. G. Dever は Two Approaches to Archaeological Method—the Architectural and the Stratigraphical, *Eretz-Israel*, No. 10, 1973 (Dunayevsky Festschrift) という論文を書いた。その骨子はパレスティナ考古学の方法論をケニョン以前の建築物中心のものと、ケニョン以後（1950年代—）の層位中心のものとに分け、更に Kenyon-Wheeler 法と呼ばれるものが、Shechem と Gezer におけるアメリカの発掘隊のもとで更に発展させられた (baulk/debris-layer method) 次第を述べ、更にその当事者の一人として、この最新の方法の得失を論じている。著者によれば、この方法の長所は問題点の集中的な検証力にあるので、過去に稚拙な方法で掘られたが今なお問題とするに価する重要な諸遺跡の再発掘にむいている。新しい遺跡の発掘に対しては、仕事の進度が遅く、資金がかかりすぎ、遺跡の全容が捉えにくい上、新方法の急所であるボルクでさえも遺構認識の妨害をすることもあり得ることを認めている。それ故、新しい発掘に際しては、予備調査を十分にした上、問題点をしぼり、可能な限り規模を小さくする必要がある。主として、イスラエル側からなされる、これ等の批判点は認めた上で、それは決して、ケニョン以前の建築中心の発掘法にもどることであってはならない、新方法は欠点を含みつゝも、考古学を歴史たらしめる唯一の道である、と主張している。一九六七年の「六日戦争」にいたる約一〇年間は、イスラエル側と主としてヨルダン領内で活動する英米の考古学者との間には、同じく Kenyon-Wheeler 法を重視していても、実質的交流の道が断たれていた。Dever はその間のアメリカ側の貢献を、オルブライトの伝統にもとづく土器研究の重視と、supervisor クラスのチーム・ワークの強調とにあるとし、他方イスラエル側の貢献を、大規模発掘の組織化、土器研究の体系化、実験室や博物館の完備、volunteers の動員力などであると考えている。

最近のイスラエル考古学の方法論に関する記述は A. Negev ed., Archaeological Encyclopedia of the Holy Land, 1973, Art. Archaeology (Methods of Research), pp. 33-35 や、とりわけ Y. Aharoni, Z. Herzog, M. Kochavi, S. Moshkovitz and A. F. Rainey, Methods of Recording and Documenting, Tel Aviv Univ., 1974 に見ることが出来る。後者はアハロニの Beer-Sheba 発掘の際の Instructions for Area Supervisors をもとにしたものであり、アハロニ自身記している通り、イスラエルの第二次大戦後における主要なマウンド発掘 (Ramat-Rahel, Hazor, Arad, Beer-Sheba) の経験をふまえている。全体として、ケニョンの影響が完全に浸透している上、supervisor クラスの活動をかなめとするなど、アメリカ系の発掘技術に近づいているが、Dever が上述のごとく指摘するイスラエル独自の特色がはっきり出ている（例えば、volunteers のより有効な活用、書式の多様さ）。又、locus の定

義（any defined area of the excavation from which finds are recorded; i.e. usually rooms...）に見られるように、建築物中心の考え方もとり入れられている。アメリカのオルブライト記念考古学研究所が、イエルサレムのイスラエル領内に入り、テル・エル・ヘシやゲゼルでアメリカ隊が再発掘を進め、イスラエルとアメリカの双方が独自の方法論をまとめあげた現在、両者の今後の交流が単なる技術論の水準にとどまることなく、シリア・パレスチナ古代史の理解に大きな成果を生み出すことが期待される。

註

（1）サマリア発掘調査史考、一・二、史学、四一―三・四二―二、昭和四三・四四年。考古学と風土、日本オリエント学会講演、昭和四七年一〇月一四日、於東京天理教館。

（2）Paul Wilbert Lapp (1930-1970) カリフォルニア生れのパレスティナ考古学者。ラップを中心に考察する理由は二つある。一つは、彼が一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけてのアメリカのパレスティナ考古学界で、方法論上重要な仕事を行ったこと、一つは、一九七〇年四月二六日、キプロス島のKyrenia 海岸で遊泳中不慮の死をとげ、すでに故人となっていることである。

（3）前者は Montet, Dunand 後者は Schaeffer, Contenson などフランスの考古学者によって発掘されてきたが、これ等の報告書は必らずしも読みよいものではない。特に、ビュブロスの発掘は方法論上重大な欠陥（層位に従わず、機械的に水平に掘ったこと）を指摘されている。P.W. Lapp, Biblical Archaeology and History (=BAH), 1969, p.74; K.M. Kenyon, Syria and Palestine c.2160-1780 B.C., CAH, 1965, p.54; ibid., Amorites and Canaanites, 1966, p.46. しかしラップがビュブロスの発掘をもって、R de Vaux 以外のフランスのオリエント考古学者の "The generally apalling... tradition" を代表させたのに対し、BAH の書評において André Parrot はそれを行きすぎとした。*Syria* XLVII, 1970, p.406. 一般にアメリカのユダヤ系の豊富な資金をもととする英米の発掘に比し、他の国の調査隊が不十分な結果に陥りやすいのは事実であるが、方法論的にみてもフランスのシリア各地の発掘が新味に乏しく、メソポタミアとの地理的近さからくる異質的な側面をもっていることも事実である。シリア・パレスティナ考古学の発達史の主流はアングロ・サクソン系とユダ系の考古学者の手で占められていると云える。

（4）しかし、この両者が完全に同じことを指すとは限らないし内容の定義もさまざまである。例えば、W.F. Albright は聖書考古学の扱う範囲を前九〇〇〇年から七〇〇年頃まで、インダス川からスペインまで、と主張している（Impact of Archacology on Biblical Research, New Directions in Biblical Archacology, ed. D.N. Freedman and J.C.

Greenfield, 1971, pp. 1f.)

(5) P. W. Lapp, BAH, p. 66 以下。

(6) W. Keller, Und die Bibel Had Doch Recht, 1955. (邦訳、歴史としての聖書、山本書店刊、一九五八)

(7) P. W. Lapp, BAH, p. 89. アメリカの聖書考古学者の多くはミッション・スクールの教員であり、多かれ少かれ、神学について専門的知識を持っている。彼等が最近の神学の傾向や論争にいかに深い関心を抱いているかは、ラップのBAH, chapt. 2, 註7のオルブライトの論文、同じ本の中のG. E. Wrightの論文 Biblical Archacology Today などを見れば分る。ラップは考古学そのものの歴史研究への寄与という点で懐疑的なので、バルトやブルトマンの新しい神学、とりわけ信仰と歴史を切りはなそうとする実存主義や非神話化や「神の死の神学」などに頭から反発してはいないが、ラップよりも一世代前の聖書考古学の大家として、オルブライトもライトも聖書の歴史や神学の理解に対する考古学の貢献を固く信じており、ブルトマン主義を激しく攻撃している。ラップも考古学の価値について懐疑的であるというだけで、或はむしろ懐疑的であればある程、信仰の歴史や考古学における重要性の認識に向う傾向があったようである。そして、彼の懐疑主義の根拠もBAHの評者パロによってかなりはっきりと疑問を投げかけられている。

(8) W. F. Albright, The Archaeology of Palestine, 1963, pp. 19f.

(9) 註1の史学の拙稿参照。

(10) Archacology from the Earth, 1954, pp. 29f. この主張をそのまゝ受けいれ、Wheeler-Kenyon 法をことさらに高く評価したパレスティナ考古学の概説書に H. J. Franken and C. A. F. Battershill, A Primer of Old Testament Archacology, 1963 がある。後述する通り、Shechem の発掘において Wheeler-Kenyon 法を採用し、ラップと共にアメリカのパレスティナ考古学の潮流に転換をもたらした G. E. Wright でさえ、この本に対しては「健全な学問的態度につきものの公正さが欠けている」と厳しい書評を書いている。たしかにレイスナーからオルブライトに到るアメリカのパレスティナ考古学の寄与に対するフランケンの評価は不公平なものであるが彼自身はその後、ヨルダン川流域の Tell Deir 'alla の発掘で重要な成果を収めた (BAH, p. 73)。

(11) G. E. Wright, Archacological Method in Palestine—An American Interpretation, Eretz-Israel, Vol. 9, W. F. Albright Eestschrift, 1969, pp. 120ff.; G. R. H. Wright, A Method of Excavation Common in Palestine, *ZDMV*. 82, 1966, pp. 113-119. より詳しいレイスナー論は G. E. Wright, Phenomenon of American Archawlogy in the Near East, Nelson Glueck Festschrift, 1970.

(12) 例えば、日本隊が一九六四—六年に調査した Tel Zeror は中期青銅器時代からローマ帝政期までの生活層をきちんと含

んでいた。同じことは Gezer の調査隊も挙げている。ゲゼルの場合は、金石併用期からローマ帝政期までのどの時代の痕跡も存在する。W.G. Dever, H.D. Lance and G.E. Wright, Gezer I, 1970, p.7.

(13) J.W. Crowfoot et al., Sawaria-Sebaste I, 1942; III, 1957.

(14) G.A. Reisner et al., Harvard Excavations at Samaria 1908-1910, 2 vols., 1924. この報告書も又、第一次大戦の影響をうけて、編集と発行に著しい困難と遅延をとるなった。もし、順調に行っていれば、レイスナーの方法はもっとよく知られるようになっていたろう。

(15) サマリアの発掘からこの頃までの約二〇年間は、ケニヨンはロンドン大学考古学研究所で、所長の秘書を長期間つとめるなど比較的じみな存在であった。

(16) Beginning in Archacology, 1952.

(17) BAH, pp.72-74. 但し、これ等の発掘の報告書はかなり遅れ気味であると云えよう。

(18) その代表は上掲のフランケンの著述。Cf., G.E. Wright, Albright Festschrift (上掲) p.120.

(19) Dhiban の発掘。この点は、ラップによると、後述する Shechem の初期の発掘でも同様であった。Cf., BAH, p.74.

(20) Albright, New Directions (上掲)、p.8; ibid., New Horizons in Biblical Research, 1966, p.2.

(21) 一九五六―七〇。報告書は G.E. Wright, The First Campaign at Tell Balâṭah, *BASOR* 144, 1956, p.9-; ibid., The Second Campaign at Tell Balâṭah, *BASOR* 148, 1957, p.28-; L.E. Toombs and G.E. Wright, The Third Campaign at Balâṭah, *BASOR* 161, 1961, p.11-; ibid., The Fourth Campaign at Balâṭah, *BASOR* 169, 1963, p.1-; G.E. Wright et al., The Fifth Campaign at Balâṭah, *BASOR* 181, 1965, p.7-; R.J. Bull and E.F. Campbell Jr., The Sixth Campaign at Balâṭah, *BASOR* 190, 1968, p.2-; J.D. Seger, Shechem Field XIII 1969, *BASOR* 205, 1972, p.20; E.F. Campbell Jr., J.F. Cross and L.E. Toombs, The Eighth Campaign at Balâṭah, *BASOR* 204, 1971, p.2-.

(22) New Directions (上掲), pp.8f. ライトが盲目的に Wheeler-Kenyon 法に従ったのではないことは、ケニヨンが樹立したサマリアの層位認定に対しても、シケムの実例にもとずいて批判・再検討を加えていることで分る。Archacological Fills and Strata, *BA* XXV, 2, 1962, p.34-40; ibid., The Bible and the Ancient Near East, Essays in Honor of W.F. Albright, pp.120f.

(23) BAH, p.68.

(24) G.R.H. Wright ZDMG, 1966 (上掲), pp.119-122; cf. W.G. Dever, Gezer I (上掲), p.10, n.11; G.E. Wright,

Albright Festschrift（上掲）, p. 128.

(25) ラップはオルブライトがケニヨンの方法以前に永続的な成果をあげ得た理由として「細心な注意力をもってすれば、基本的な層序は旧来の方法でも理解されうる」と述べている（BAH, p. 76）。

(26) 筆者は一九七三年夏、イスラエルの Tel Beer-Sheva, Tel Dasile, Tel Aphek などの発掘現場を訪れ、それぞれの遺跡で用いられている方法を調査したが、それ等は明らかにヤディンのハツォル発掘の伝統をひいている。一九六四―六年の日本隊のテル・ゼロール発掘調査もこの伝統に属する。

(27) 細部は別として、全体的にみると、現場から報告書の作成までのあらゆる手順を考えて、不必要なものをはぶき、急所をおさえる記録法に向っている。但し、後述するアメリカ隊の方法とちがう点は、細部にいたるまでの厳密さを要求せず、勘を働かせることに活路を見出すことであろう。これは外国の調査隊とことなり、調査員も調査対象も常に現地にある、という安心感の故でもあろう。

(28) Cf. W. F. Albright, The Phenomenon of Israeli Archaeology, Nelson-Glneck Festschrift（上掲）, pp. 57-63; A. Parrot の書評、*Syria* XLVIII, 1970, p. 407.

(29) G. E. Wright, Nelson-Glueck Festschrift（上掲）, p. 128.

(30) 彼の伝記は D. R. Hillers, Paul W. Lapp in Memoriam, *BASOR* 199, 1970, pp. 2-4 による。

(31) Palestinian Ceramic Chronology, 200 B. C.-A. D. 70, 1961.

(32) 主要な報告書は The Dhahr Mirzbanch Tombs, 1966; Soundings at 'Araq el-Emîr, *BASOR* 165, 1962, pp. 16-34; The Second and Third Campaigns at 'Arâq et-Emîr, *BASOR* 171, 1963, pp. 8-39; Taanak, *BASOR* 173, 1964, p. 4-; The 1968 Excavations at Tell Ta'annek, *BASOR* 195, 1967, p. 2-.

(33) 当時、日本のテル・ゼロール調査隊は第一・二次の発掘を行っており、その期間中にゲゼルを見学し、ライトに会った。世界の戦史（人物往来社）月報1、昭和四一年、三頁。

(34) *IEJ* 20, 1970, p. X.

(35) 一九六七年八月に筆者がイスラエルを訪れた際、ケニヨンはイェルサレムの帰属についてタイムズに発表した記事のために不評を蒙っていた。それ以来、彼女のイェルサレム南壁やダヴィデの町のトレンチは、発掘が中止されたまゝであり、南壁のトレンチはその後、B. Mazar 指揮のイスラエルの発掘隊のトレンチに吸収された。又、イギリスの考古学者たちは、筆者が一九七三年にイスラエルに行った時も、イスラエル領内では発掘していなかった。彼等は依然ヨルダンや北アラビアをフィールドにしている。

(36) BAH, pp. 75; 85. 又、ゲゼルではイスラエルの労働事情

も考慮して、原地の労働者は用いず、すべて学生のヴォランティアを募って使用した。シケムではまだ多数の労働者を使っていた。例えば、一九五六年には八〇—八五人、一九六三年には一二五人。一九六三年のターナクでは一二五人。一九七三年夏のイスラエル各地の発掘では、大勢はヴォランティアの使用に傾いていた。

(37) Gezer I (上掲), p.9 参照。

(38) 報告書は S.S. Weinberg, Tel Anafa: The Hellenistic Town, *IEJ* 21, 1971, pp.86-109; Tel Anafa-A Problem-Oriented Excavation, *Muse, Annual of the Museum of Art and Archaeology*, University of Missouri-Columbia, 3, 1969, pp.16-23; ibid., Tel Anafa: The Second Season, *Muse* 4, 1970, pp.15-24; ibid., Tel Anafa: The Third Season, *Muse* 5, 1971, pp.8-16; ibid., Tel Anafa: The Fourth Season, *Muse* 6, 1972, pp.8-18. パレスティナ考古学の動向（ヘレニスティク時代）オリエント、一四—二、一九七一、三九—四〇頁。筆者は第五次の調査に加わったが、その間現場とキャンプにおける調査員(area supervisors)を主体とした活動を実地に学ぶことが出来た。又、隊長ワインバーグ教授とフィールド・ディレクター Miss Barbara Johnson の厚意によって、Excavation Manual を研究し、ノートすることが出来た。

(39) Gezer I (上掲), p.9 ではライトは著者の一人でもあるので、ライトの名前は出ず、それに相当するものとして「オルブライトの伝統に立脚して、シフムなどのアメリカの発掘の特徴をなしてきた、入念な土器の現場における解析」が強調されている。これによっても、上述の通り、現代パレスティナ考古学の方法論的系譜は、

Petrie—Reisner-Fisher—Albrigh—Wright→（イスラエル）
×
Wheeler—Kenyon—Yadin→（イスラエル）
British School→（ヨルダン）

であることが明らかである。

(40) "Careful separation and interpretation of earth layers aided by the use of earthern sections and balks which are studied, interpreted, and recorded."

(41) "The Kenyon approch supplemented by the detailed daily analysis of pottery which then served as a guide to and a check upon the stratigraphical analysis."

(42) Daily top plan は一九六一年の 'Araq el-Emir の発掘においてラップが導入した記録法である (BAH, p.79)。新しい方法論の一つの特色は、旧法の水平方向への志向から垂直方向への志向に転換したことである。その結果、遺構の表面は狭い範囲しか露出されないことになり、土層の上下関係にのみ関心が流れてしまう結果になるので、毎日プランを手書きして遺構認識の補いとする (BAH, p.77)。

(43) テル・ゼロールなどヤディンの伝統にある発掘調査では、ノート・ページ（Note pages）とディリー・トップ・プランはバスケット・リストとその下部の略図及びその裏に書く文章体の略報、ローカス・シートはローカス・ダイヤリーに相当する。但し、そのいずれも更に入念で詳細な報告が要求され、かつフィールドですべてを記さなければならない。

(44) ケニヨンでさえも、ジェリコについては基地の発掘結果を記した二巻を出しただけで、イェルサレムについては、一説によれば、すでに正式報告書の刊行をあきらめた、とさえいわれている。

(45) BAH, pp. 75-77.

(46) ラップは土器の標準化石は、新しい方法でしか提供しえないと信じていた（BAH, p. 80）。

(47) 例えば、日本の歴史考古学でもこのような考古史料と文献の取り扱い方は主張されている。斉藤忠、日本古代遺跡の研究和昭四三年、一〇頁参照。

(48) New Directions（上掲）中のオルブライトとライトの論文に対する批評 JNES 31-1, 1972, p. 51.

(49) BAH, p. 68.

(50) BAH, p. 89.